英　語　科

蒔　田　　守
肥　沼　則　明
久保野　り　え
植　野　伸　子

新学習指導要領に対応した授業作りの工夫（5）

－小中連携・中高連携を意識した指導と新教科書の扱い方－

1．はじめに

(1) 本校英語科独自の研究の歩み

大正11（1923）年にH.E.パーマーが本校の前身である高等師範学校附属中学校を「オーラル・メソッド」の実践校として以来，その指導法を脈々と受け継いできた本校英語科は，平成7年度に現在の4人のうちの3人がそろったところで新たな局面を迎え，そこから次のような研究を行ってきた。

○平成 8 ～11年度…「育てたい生徒像」を設定し，「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動の3年間の指導計画を作成した。

○平成12～15年度…「自立した学習者」を育てるための4つの要素を相補関係を持たせて指導することの重要性とその具体的指導内容を提案した。

○平成16～18年度…入門期指導のあり方と具体的な指導内容を提案した。

そして，平成17年度に現在の4人の体制になってからは小中連携と中高連携を意識した中学校の英語学習指導のあり方を議論しはじめ，平成19年度にはその具体的指導事項を提案した。

このように，本校英語科は時代の要請によるものだけでなく，英語教育において恒久的に追究されるべき内容を研究してきた。そして，英語科教師全員のコンセンサスを得て，授業を含めた学習指導全般においてそれらの共同実践を行い，その成果を教科として毎年研究協議会で発表するとともに，各教師個人が日本全国で行われる研修会や学会等でも発表してきた。

(2) 新学習指導要領に対する対応

平成24年度より施行された新中学校学習指導要領では，授業時数が3時間から4時間に増えることに伴って増加する言語材料や言語活動をどのように扱うか，4技能を総合的に育成するための統合的な活動をどのように設定するか，より正確な理解力と表現力を身につけさせるにはどのような指導が必要か，そして新たに導入される小学校の外国語活動で学んだ内容をいかに着実な知識や技能として定着させるか等が求められている。それを受けて，本校英語科では平成20年度より「新学習指導要領に対応した授業作りの工夫」をテーマに掲げて研究を進め，以下のような発表を行ってきた。

○平成20年度…4技能を総合的に育成するための統合的な活動の例を含めた3年間の授業作りの工夫を提案した。

○平成21年度…新学習指導要領の完全実施に向けて本校英語科として見直さなければならないカリキュラム編成上の課題を明らかにした。

○平成22年度…入門期指導に焦点をあてて他の中学校でも実践できる指導内容とそれを支える指導理念について提案した。

○平成23年度…新しい教科書への対応と小中連携を考えた入門期指導の転換の実践例を紹介した。

2. 本年度研究テーマ設定の理由

先述のように，平成23年度は本年度より完全実施となる新学習指導要領下で使用される教科書を授業でどのように扱ったらいいのかということや，最低でも1年間，週1時間の外国語学習を経験して中学校に入ってくる全ての新入生に対してどのような入門期指導を行っていったらいいのかという基本方針を提案し，公開授業においてもその具体的指導例を示した。そして，それらの方針や具体案については参会者（英語科291名）及び指導助言者（筑波大学大学院教授　卯城祐司先生）より概ね了承していただいた。しかし，今年度になって実際に新しい教科書を使い始めてみると，その前にはわからなかった問題点や課題が見えてくるようになり，その度毎に英語科内で対応を協議することになった。これはおそらく全国の中学校でも起こっていることであろう。しかも，中には誰にも相談することができず，個々の教師が単独で判断しながら各問題点を乗り切ってきているということもあるのではないかと思われる。

そこで，本年度は基本的には昨年度研究を進めたことを踏襲しながら，本年度になってから明らかになってきた問題点や課題を解決する手立てを提案すべく，標記のようなテーマを掲げて研究を進めることにした。そして，新しい教科書をどのように扱いながら授業を進めていくのがよいのか，外国語学習を経験してきている生徒を中学校の英語科という教科の中でどのように指導していったらいいのかということのアイデアを提案することにした。

3. 小中連携に関して

(1) 小中連携の課題

平成23年度から小学校での外国語活動が開始され，基本的に5・6年生で週1時間，卒業までに70時間の学習を行うようになった。中学校教師は，小学校で行われた学習を生かすことが自分たちの役割だと肝に銘じたい。そのためには，新入生の実態を把握し，生徒の必要を理解して指導しなければならない。現時点で我々がとらえている実態は以下の通りである。

① こんなにできている

ア）定型表現

A: Nice to meet you. B: Nice to meet you, too. などの定型表現については，きちんと聞き取れるし，自信を持って素早く反応できる。

イ）聞き慣れた表現

「英語ノート」で最終ゴールとされた「私の夢」で使われていた want to ... を使って，生徒は限られた語彙の中ではあるが，自分のしたいことをきちんと表現できる。加えて How many ...? などの疑問文についても，的確に単語文で応答することができる。

これらは小学校での外国語活動の積み重ねが現れている部分である。

② こんなことができない

ア）文法

be 動詞の文と一般動詞の文の区別が付かない。

イ）語順

「私の好きなスポーツはサッカーです」が，*I like sport is soccer. のように語順が日本語と同じになる。

ウ）音の正確さ

数字の1から10までは，聞き分けることはできても，正しい音（相手に通じる音）で発話できない。

③　こんな考え方・感じ方をしている

ア）「英語は楽しく参加すれば良い」

小学校の「活動」から「教科学習」になったことに気づかず，その時間に参加し楽しめば良しとすることがある。

イ）注意されると大きく凹む

小学校では発音訂正されることがあまりないので，中学校で個人レベルで発音を訂正されると，あたかも人格を否定されたように感じてしまう。

ウ）評価されることへの恐れがある：特に実技テスト

英語は実技教科なので，実際に使えることが大切なのだが，級友の前で自分の力があからさまになることへの恐れは大きい。

このような実態をふまえ，生徒の必要を満たす効果的な指導を行うために以下の3点が生徒に伝わるように，以前にも増して注意深く指導している。

ア）英語は復習しないと身に付かない

授業内で理解できても，人は忘れるもので，復習しなければ英語は身につかないことに気づかせたい。

イ）自分で気づいて自分で直すことが大切である

きちんとした英語力を身につけるためには，自分でモデルや正答との違いに気付き，自ら音を訂正したり，英文を書いたりして一歩一歩進む大切さを気付かせる必要がある。

ウ）英語授業はみんなで作る

英語はコミュニケーションの授業なので，授業自体が教師と生徒，生徒と生徒のコミュニケーションの場であることが望ましい。従って生徒にはわかることにはすぐ反応し，わからないときには意思表示させるなどして，授業をコミュニケーションのための英語を身につける場としたい。

(2)　新教科書の入門期指導ページ内容とその使い方

新学習指導要領の施行により，平成24年度から使われる新教科書の構成が各社とも以前のものと比べて大きく変わった。その中で，昨年度は時間数の増加に伴う指導内容の増加により，総ページ数と各ページの語数が各社とも大幅に増えたことを述べた（昨年度要項p.112）。これは，より確かな力をスパイラルな学習によって身につけさせられるような構成にするという各社の思惑が一致したためと思われる。また，中学校と高等学校の間にあるギャップを埋めるべく，より発展的な読み物教材を多く取り入れたということもあるであろう。

一方，平成23年度から小学校で完全実施されている外国語活動を経験してきた新入生を指導するための1年生用教科書の入門期指導ページ（ここではレッスンに入る前の扉のページを「入門期指導ページ」と呼ぶことにする）にも各社の工夫が見られる。そこで，ここでは各社の入門期指導ページの内容を新旧教科書の比較も含めて明らかにし，その有効な使用法を考えることにする。

表1　各教科書の入門期指導ページ内容の新旧比較

指導領域	指導項目	版	新教科書（H24年度版）						旧教科書（H18年度版）					
		教科書	NH	S	NC	T	C	OW	NH	S	NC	T	C	OW
		総頁数	12	8	10	13	12	9	8	8	12	11	10	9
アルファベット	文字の名前の発音		○	*	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	文字の音の発音		○	*	△	○	△	○	△	○		△	△	△
	単語の中の文字の認識		○	*	○	○		○	○	○	○	○	○	○
	文字を書く		○	*	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
単語	単語の認識		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	つづりの認識		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	△	○
	音とつづり		○		△	○								
	単語を書く		○				○		○					
語彙	数字		○	○			○						○	○
	曜日		○											
	月（名）・日（序数）		○											
	色		○	○		末								○
	単語（以下を複数含む）			○		○	○	○	○		○		○	
	スポーツ（部活）		末	末	○	末		末		○	末	○		末
	食べ物		末		○	末		○	○	○		○	末	末
	野菜・果物		末		○	末		○	末	○	末	○	末	末
	動物				○	○		○				○	○	
	身の回りの物					○		末	○	○	○	○	○	
	国・都市						○							
	行動を表す動詞			○									○	
表現	挨拶		○	○	○	○	○	末	○	○	○	○	末	○
	教室英語（教師→生徒）		○	*	末	○	○	末	○	○	○	○	末	○
	教室英語（生徒→教師）		○		末	○	○	末			○	○	末	○
	数字の足し算・引き算		○				○							
	曜日の尋ね方・答え方		○											
	月日の尋ね方・答え方		○											
	好きな物・持っている物		○	○	○	○								
	自己紹介・できること			○		○								
	時刻の言い方						○							
場面	会話場面の判断				○			○						

【凡例】NH…東京書籍，S…開隆堂，NC…三省堂，T…学校図書，C…光村図書，OW…教育出版
○…明示的に指導　△…結果的に指導　末…巻末資料にある　＊最初のレッスンで指導

表1は，現行の文部科学省検定教科書6社の入門期指導ページの内容を旧教科書（平成18度版）と比較したものである。各教科書でそれぞれのページのタイトルや内容が異なっており，それをそのまま載せても比較が難しいと考えたので，全教科書を概観した後にどのような領域の何が指導できるように構成されているかを，前者を「指導領域」，後者を「指導項目」として分類した上で表にしてみた（それぞれの分類基準は後述する）。そこで，そのデータを元に各教科書の入門期指導ページについて概観してみることにする。

なお，これから記すことは各社教科書間の優劣を述べるものではなく，あくまでも全体的な傾向を知るためのものであることをお断りしておく。

① 総ページ数

入門期指導ページは，旧教科書でもすでに全国各地の小学校で行われていた総合的な学習の時間の「英会話」を多少意識しているのか，そこで学習したと思われる内容を復習するような内容が扱われている（もっとも，*New Horizon*（東京書籍）を見る限りでは，平成9年度版，平成14年度版もほぼ同じ内容であり，総ページ数も変わらない）。これに対して，新教科書では，1社が1.5倍増，2社が微増，2社が増減なし，1社が微減となっている。ただし，「増減なし」と「微減」のももの，実は一部を巻末に回したり最初のレッスンで扱ったりしているためにそうなっているのであり（「表現」参照），実質的には増加しているので，全社の教科書が入門期指導ページの内容を充実させたものにしようとしたことがわかる。

また，以前のこれらのページは「レッスンに入る前に扱っておいたほうがいい」程度の位置づけのものが多かったが，新教科書では「レッスンに入る前にぜひ扱ってほしい」という位置づけになっているものが多い。例えば，*New Horizon* では入門期指導ページに9項目が設定されているが，これらを12時間で扱うように指導計画に位置づけられている。

② アルファベット

アルファベットはどの版でも扱われているものであるが，新教科書の特徴としては「文字が表す音」を明確に扱ったものが増えたことであろう。旧教科書でも1社が明確に指導できるようになっており，4社が結果的に音を扱うような構成になっていたが（アルファベットを扱うページで，その文字を使った単語の最初の音がそうなっている），新教科書では前者が4社，後者が2社と進歩している。

アルファベットの音を扱うことは，入門期指導にとどまらず単語を読めるようになるための基本の指導としてとても大切である。特に，小学校の外国語学習では発音矯正が行われることはほとんどないため，不明瞭な発音のまま単語や表現を覚えてしまっている児童が多いので，中学校に入った時点できちんと再指導を行いたい。ただし，音の指導を明示的に示していない教科書を使う場合は，教師が先述の単語の最初の文字が音になっていることに気づき，それを取り上げて指導する必要がある。

③ 単語

ここでいう「単語」とは，英語が単語で構成されていることを指導したり，つづりと発音を指導したりするページのことで，いろいろな単語を習得することを目的とした「④ 語彙」のページとは区別することにする。

アルファベットと同様に，旧教科書でもすでに単語の認識とつづりの認識を指導するページはどの教科書にもあった。新教科書では，これらに加えて「音とつづり」の初歩を

指導するページが設けられているものが数社ある。以前から「入門期で『聞くこと』『話すこと』の指導はしっかり行われるようになったが，そこから『読むこと』への指導には大きなギャップがある」という指摘があった。つまり，英語を読めるようにするための指導を行わないまま単語や教科書を無理矢理読ませてしまっているということである。そのことへの反省から，単語を読めるようにするための指導，つまりフォニックスを教えることが広まってきた。もちろん，教科書の，しかも入門期指導ページという限られた範囲でフォニックスのすべてを扱うことは不可能であるが，その基本中の基本を扱う意味はあるであろう。

一方，単語を書くという教科書も若干ではあるが増えた。これは，小学校で習った単語なら書くことができるであろうということから設定されているものと思われる。副教材のペンマンシップなどでも，文字の練習を終えた後に単語を書く練習をさせるページがあるのがほとんどであると思われるが，「書くこと」の指導は慎重に行いたい。その理由は，音とつづりの関係を理解しないまま闇雲に書かせることは生徒に「英語のつづりを覚えるのは難しい」「英語のつづりの覚え方がわからない」という意識を植えて付けてしまうからである。教師がそのことを考えずに，「教科書／ペンマンシップにあるから書く練習をそのままさせた」ということはないようにしたい。

④ 語彙

入門期の時点で身近な単語（ほとんどは名詞）をできるだけ多く指導しようというのは旧教科書にも設定されていたものであり，新教科書でもその傾向は変わらない。しかし，表1には表れていないのはその単語の数であり，各社とも各ページで扱われている単語の数が大幅に増えている。その理由は，それらの多くは小学校の外国語活動で扱われたものであるからで，ここではそれらの再復習という意味合いが強いものと思われる。1社だけが以前の教科書であれば途中で分けて指導していたものを入門期に持ってきているが，いずれも授業の開始の挨拶に続いてよく行われる曜日や月日の確認等に用いられるものであり，他の教科書を使っている教師でも実質的にはこの時期に指導してしまっているものであろう。

指導にあたっては，「小学校で習ったでしょ？」ということで簡単に済ませてしまうのではなく，確認の意味もこめて改めてきちんと指導すべきであろう。特に，身近な単語だけに日本語的な発音が身についてしまっていることが多いので，正しい発音を指導したい。

⑤ 表現

平成元年度の学習指導要領改訂で「聞くこと」と「話すこと」の指導を充実させることが謳われ，「コミュニケーション活動」ということばが使われるようになってから，授業中に教師や生徒が話す英語も大切な言語材料であり，そうした活動そのものも大切な言語活動であるとされてきた。そうした背景もあり，旧教科書でもいわゆる「教室英語」(Classroom English) が多くの教科書で明示的に扱われていた。もっとも，それらは教科書に載っていただけであり，それらを実際に指導するかは教師の裁量に任されていた。その傾向は新教科書でも変わらないが，新たに自己表現を可能にするような表現が載っていたり，実際に自己表現をさせる活動が設定されていたりする教科書が増えた。これはすでに小学校の外国語活動で行われていたことが前提になっているものと思われる。すなわち，小学校ですでにそれらの表現は扱われているので，ここではそれを復習することでさらに

しっかりと身につけさせようとしているのであろう。

⑥ 場面

小学校の外国語活動では，場面設定が重視され，そこで使われる英語の表現を活動をとおして学ぶという手法がとられている。そのような学習経験からどの程度の力が身についているかを確認する意味で設定されていると思われるページが2社のものにある。具体的な活動内容はいずれも「聞くこと」に特化されたもので，文字はいっさい無く，会話が行われている場面がイラストで複数示されていて，CD等から聞こえてくる会話を聞いてどの場面で話されているものかを選ぶものとなっている。

このようなページを扱う際には，できれば「聞くこと」から実際に「話すこと」へと発展させてみたい。それは聞こえてきたことから場面をイラストで判断するだけでは簡単すぎるからで，それぞれの会話で使われている表現を拾って練習したり生徒同士で演じさせたりして，小学校で習ったことから中学校で学習することへの橋渡しになるような活動を設定するようにするといいであろう（1社のものがそうなっている）。

(3) 今年度の中学1年生の実践

① 教科書使用以前の指導

本校では，教科書を開かせる前に音声のみで理解させ口頭練習させる入門期の時期を設けている。これには長い伝統があり，言うまでもなく言語は音声が基本であるという考え方に則っている。この音声指導の期間をどれくらいとるかは，年によって異なる。本年はおよそ20時間程度である。

すでに小学校で英語に触れた生徒が中学に入学するようになって久しいが，今年の1年生は新指導要領の下，「外国語活動」として英語を経験してきている。耳に馴染んだ単語も多く，英語は声を出すもの，という感覚もわかっている生徒が多い。本校が長らく「入門期指導」として行ってきたことの理念や内容の一部は，小学校英語で実践されていると考えられる。

その一方で，基本的なことであっても小学校の外国語活動で実践されていないことは，意識的に中学の入門期指導の中で扱う必要がある。

＜小学校で行われる活動＞

・耳で聞いてわかる語彙を増やす
・英語の音に慣れる
・英語での指示に慣れる
・口頭でコミュニケーションする

＜小学校では行われない活動＞

・推測だけに頼らずに意味を理解する
・構文を理解する
・正確に発音する
・単語や文を読む
・文字を正確に書く
・単語を綴る

以上のことをふまえ，今年度実践するにあたっては，以下のことを試みた。

(ア) つづりを書く活動に，早めにていねいに導く。

数字や日付のように耳になじんでいる単語の表現を口頭で早い時期に示す他，つづりについても例年よりも早く示した。「単語は言いながら書く」ということを繰り返し指導してノートに書かせた。

(イ) 既習，未習の枠をはずれたインプットも取り入れる。

本校では，授業の補いとしてNHKラジオ「基礎英語」を聴取させているが，そのシラバスは教科書に沿ってはいない。しかし，そうした自在なインプットの方法も一方ではプラス面もあると考えて，未習文法があるページも，ザッと意味を説明して音読したり，一般動詞を見つけさせたりした。

(ウ) 文の構成を早めに意識させる。

英文が主部と述部から成り，動詞が必ず一つあるという文の構成を明示的に早い時期に指導した。文法用語は「主語」「動詞」という最低限にとどめるが，板書も用いて文構造をつかませるようにした。

② 教科書の扱い

(2) で述べたように，各教科書とも小学校での英語体験を盛り込むよう工夫されている。それは，逆に注意しなければならない点ともなる。理由は2つある。

第一に，小学校での定着は生徒によってさまざまであるということである。*Hi, Friends*（旧「英語ノート」）で扱われている事項でも，各小学校でどの程度扱われたかはわからない。また，自治体で独自の教材やシラバスを作っている所もある。「入門期指導ページ」を完全な既習事項のように扱うのは危険である。

第二に，なじみのある重要な機能語が新教科書の中で非常に軽い扱いになっていることがあるという点である。例えば，*One World*（教育出版）で言えば Let's ～. がある。従来は命令文がターゲットである課によく扱われ，そこで学ぶべき表現となっていたことが多い。しかし，現行の *One World* では Lesson 1 の後の Word Watch というページで *Let's write numbers!* という，数字の綴りを書かせる活動の表題に出ているのが初出のページである。新語の欄に let's が出ているので原則としてはここで教えなければならない。確かに，Let's ～.「～しよう」という表現は多くの生徒が耳に馴染んでいるであろうし，意味もなんとなくわかっている生徒がほとんどであるかもしれない。しかし，そのことと学校で使える表現として学ぶこととは違う。きちんと示さなければ *Let's tennis! のような誤りがなくなることはない。また，機能語に限らず，語彙拡充のページで多くの単語が出ているが，そのページだけで既習扱いになってしまうことも多いので注意しなくてはならない。

上記のことを受けて今年度の新教科書に入った時期に留意した点は，重要な語彙・表現がプラスアルファのような場所に軽く扱われているものを見逃さずに，使わせていくことである。たとえば friend も本文ではない場所に出ている。使わせるのはもちろん，どこでつづりまで書けるようにさせるのかも考えなくてはならない。あとに回すと指導しないままになりがちなので，不規則なつづりではあるが，本校ではここでつづりも扱った。

教科としての土台を築く中学校段階として，正確な理解・表現が求められるものは何かを見極め，それを見逃さずに指導していくことが重要である。

4. 中高連携に関して

(1) 中高連携の課題

小中連携が話題になる一昔前によく取り上げられていた「中高連携」の問題はどうなったのか。3. で見てきたように，小学校で外国語活動が始まり，中学教科書も改訂され，小中連携をいかにスムーズにするかということに世の中の関心が集まっているようだが，それは決して中高連携の課題が解決したからではない。新しく始まったことにスポットライトが当たっているだけで，ライトのすぐ外側に，中高連携の従来からの課題が変わらずに存在していることを忘れてはならない。

また，小中連携の課題点には，以前から議論されている中高連携の課題点と共通する点も多い。「小・中の教員はお互いの学校でどんな授業が行われているかよく知らない」「小学校で生き生きと表情豊かに英語を話すことを楽しんでいたのに，中学校では生徒の英語が無表情になってしまっている」など，「小・中」をそれぞれ「中・高」に読み換えれば，同じような問題がただ3年早まっただけのように見える。それはすなわち，従来の中高連携の議論が，小中連携の課題解決にも役立てられることを意味する。

連携の課題の多くは，お互いをよく知らないことに起因している。つまり，「知る」だけで改善できることは大いにある。中学では1科目だけだった「英語」が高校で何科目に分かれ，何単位ずつなのか。どの科目が必修なのか。中学での既習・未習項目が高校教科書ではどのように出てくるのか。新しい単語・熟語はどれくらいどのように扱われるのか。どんな大学入試が行われているのか。直接授業を見られれば一番良いが，例えば中学教員が高校教科書に目を通すだけでも大きな一歩になる。以下，中高連携を阻んでいると思われるギャップを何点か述べる。

① 教科書の分量と時間数

まず中学校と高校の教科書では分量がまったく異なる。高校の従来の「英語Ⅰ」に当たる「コミュニケーション英語Ⅰ（以下，コミⅠ）」の教科書の第1課は500語程度で始まるものが多い。中学校の新版教科書も分量が増えてきた（表2参照）とはいえ，各課は中3の最後で300語程度，読み物が500-600語程度のものが2～3編入っているだけで，高校教科書の分量に圧倒されてしまう生徒の数は減りそうもない。中高の橋渡しとして期待されていた「コミュニケーション英語基礎」は検定教科書が1冊しか発行されず（「コミⅠ」は27冊，「英語表現Ⅰ」は17冊，「英語会話」は4冊発行される），中学校英語をどう仕上げるか，高校英語をどう始めるかの工夫は各教員が真剣に考えねばならない。

また，中高では週時間数も異なる。細かい時間数は学校ごとに異なるが，標準時間数は中学校が週4である。これに続く高校「コミⅠ」は扱う分量は増えるが，時間数は週3に減る。そして多くの高校では並行して週2時間程度で「英語表現Ⅰ」も行われると思われ，週5時間（もしくはそれ以上）の英語授業と密度の濃い教科書に耐えうる力を中学校で養っておかねばならない。

② 教科書の文体と文法・文法用語

教科書の「つくり」そのものに戸惑う生徒も多い。例えば中学校の教科書ではおなじみの固定キャラクターが高校の教科書にはいない場合が多い。年間を通したストーリー展開もない。中学校は会話（話し言葉）から成る本文が多いのに対し，高校は書き言葉が中心である。まとまった量の書き言葉を読む，書く耐性を中学校段階で養っておきたい。

また，高校の教科書では始めから文法用語がどんどん使われるが，そのほとんどは中学校の教科書には出てこず，この段階でつまづいてしまう生徒も多い。また，高校生を悩ませる句動詞（phrasal verbs）の多くは中学校で学習する語彙からできており，高校で頻出するものは中学校段階で強調しておくこともできる。ここにもお互いの教科書に目を通しておくことの必要性が表れている。

③ 「聞く・話す中心」から「4技能の統合」へ

長らく中学校は「『聞くこと』『話すこと』を中心に」としていた学習指導要領が，4技能をバランスよく扱う方向へと改訂された。スピーチなどまとまった量を「話すこと」の指導はかなり広がってきたが，「書くこと」の指導までなかなか時間を割けない学校が多いのではないか。高校入学時の生徒が，話す力に比べて正確な英文を書く力が不足していることは高校教員からよく聞かれることである。一文単位の和文英訳や条件作文にとどまらず，一貫性（coherence/cohesion）のある複数の文から成る文章を書く経験を高校入学前にもっとさせておきたい。

(2) 本年度の中2・中3の実践

新指導要領準拠の教科書を使い始めるにあたり，現在の中2・中3の生徒たちは新旧切り換えの過渡期を経験するため，教科書の扱いに例年以上の細心の注意が求められる。新旧教科書を比較検討し，高校英語への橋渡しも視野に入れて今年度実践していることを以下に紹介したい。

① 量の増加への対応

新しい教科書を使い始めて改めて実感するのは，本文の量の多さと難しさである。週時間数が3から4に増えるのに伴い，本文量が単純に考えても3割強増しになることは予測できたが，実際に授業をしてみると，量・難易度ともそれ以上の増加を感じ，今までの感覚でやっていては時間内に本文を扱いきれないこともある。

まず，分量に関して，中3の9月から3月に扱う予定の課を，本校で用いている *One World*（教育出版）の新旧教科書で比較してみた（表2）。1課のパートが3から4に増加，各課の語数が多くて約5割増加，全体でも約4割増加しており，週時間数以上の増加率であることがわかる。

	旧　版	新　版	増加率
Lesson 5	206	306	48.5%
Lesson 6	204	295	44.6%
Reading	---	500	---
Lesson 7	245	253	3.3%
まとめ Reading	546	484	-11.4%
付録 Reading	563	622	10.5%
合　計	1960	2460	39.5%

表2　*ONE WORLD 3* の課ごとの新旧版語数比較

（旧版には Lesson 6 の後に Reading はない）

これだけの量を全文逐語訳でべったりと扱っている余裕はもちろんない。4月から現在までの課では，事前に教員が本文をよく研究し，①軽重をよく見極め（どこを詳しく説明するか，どこはサッと読むだけにとどめるか），② Oral Introduction をコンパクトにし（教員が全部説明してしまわない），③ Silent Reading を取り入れる（高校への読解力養成も見据えて，生徒に自分で読み取らせる部分を作る）などを心がけるようにしてきた。また，例年行っていることだが，各課が終了するごとに和訳を配布し，生徒の本文理解の手助けにするとともに，本文を再生する練習にも使えるようにしている。

4.（1）で述べたように，高校「コミⅠ」の教科書は1課500～600語程度で始まり，年度末は800語程度まで増えるものが多い。量にひるまない英語力を養う意味でも，途中の Reading や巻末付録 Reading は飛ばさずに扱い，本文理解で終わるのではなく，4技能の統合を意識した実践を目指したい。

② 語彙・文法・文型配列の変更への対応

今年度，分量の増加以上に苦労しているのが，語彙・文法・文型配列が変わったことへの対応である。現中3は中1・中2を旧版で，中3を新版で学んでいるが，昨年度の内に新旧版の *One World* をよく比較検討したところ，教科書通りに学習していると，従来中3で扱われていた受動態と不定詞の用法がまるまる抜け落ちてしまうことがわかった。そのため，中2の年度末に授業進度を少し早め，教科書会社の了承を得た上で，新版教科書の本文コピーを用いて受動態と不定詞を扱った。

同じ教科書を用いていても文法配列は大きく変わっている部分があるため，3年分の教科書によく目を通しておく必要がある。例として *One World* の to 不定詞の扱い方を挙げておく（表3）。旧版では，中2・中3で各1課をまるまる使って集中的に扱っていたが，新版では出てくる場所も分け方も従来とはずいぶん違う。不定詞をまとめて扱っていた従来の感覚ではやりにくく感じられ，今まで以上に未習・既習項目をよく知っておかねばならない。一方，従来の倍の4課に渡って不定詞が扱われるようになったと考えれば，既習項目をくり返し扱うチャンスに恵まれたともいえる。

	旧版	新版
名詞用法「～すること」 want to ～	2年 L3-1	2年 L3-4
名詞用法「～すること」 My dream is to ～.	(Key Sentence なし)	2年 L9-1
副詞用法「～するために」	2年 L3-2	2年 L6-1/2
形容詞用法「～するための」	2年 L3-3	3年 L4-2
仮主語 it It's good for us to ～	3年 L4-1	2年 L9-2
tell/want O to ～ He tells me to study harder.	3年 L4-2	2年 L9-3
疑問詞 + to do I don't know what to do.	3年 L4-3/4	2年 L6-3

表3 *ONE WORLD* の to 不定詞の扱いの新旧版比較

また，語彙の扱いにも神経を使っている。移行期間中は教科書の未習語・既習語の扱いが，生徒の実際の未習・既習とくい違うことが多く，急に出てくる未習語に戸惑う生徒も多い。もちろん教員が気を付けてチェックしていればよいのだが，どうしても漏れが生じてしまう。教科書会社のサイトで移行に関する資料を手に入れることができ，中には冊子を配布しているところもある。旧版のどの教科書からの移行にも対応しており，どの語彙・文法項目が未習であるかが全てわかるようになっているので，ぜひ活用すべきである。